

## 「羊飼いのしるし」

2015年04月15日

ルカによる福音書 2章8節～14節。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

ページントで演じられる美しいシーンである。羊飼いたちは羊泥棒と獣から羊を守るために野宿しながら夜通しの番をしていた。辛く、寒い夜の仕事である。そこへ、天使が現われ、主の栄光が周りを照らした。栄光とは、神が見える形で臨在されるリアリティである。見たことのない荘厳な光景に羊飼いたちは恐れた。すると、天使は「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」と告げる。天使は、救い主・メシア誕生の知らせを羊飼いたちに告げた。

羊飼いは、古来誇り高い職業であった。信仰の父と言われたアブラハム、その子イサク、孫のヤコブは有能な羊飼いであった。イスラエルの理想の王ダビデも羊飼いであった。ところが、時代が下がった主イエスの時代、羊飼いは蔑まれた職業とされた。羊飼いは動物の世話をするので、羊から離れることができない。安息日の礼拝に行けない。律法を守れない人と見なされ、軽蔑の対象とされたのである。律法によって、差別管理された社会構造が生み出した基準であった。彼らは貧しく、ローマへの課税対象にもならず、夜っぴて羊の番をさせられていた。その彼らに救い主・メシアのご降誕が最初に告げられた。ここには、ルカの神学が表されている。社会から疎外されていた人々に、神の救いは優先的にもたらされる。主イエスはしばしば「後にいる者（罪びと）が先になり、先にいる者（ファリサイ派の人々）が後になる」と語っている。ルカは、主イエスの生涯は人間が作る価値観を逆転する、それが福音であると、降誕物語で主張している。

羊飼いたちが天を仰いで、天使の告げる喜ばしい救い主・メシア誕生の御告げを聞いていると、天の大軍が加わり、夜空を焦がした。空一面に天使が飛び交い、神々しい栄光に染まる。人が想像した光景の中で、これほど美しいシーンがあるだろうか。そして、天使たちは神を賛美して言う。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」「神にあれ」「人にあれ」と訳しているが、原語には「あれ」という願望の動詞はない。栄光はいと高き神に、地に平和、御心に適う人々に、と主イエスのご降誕によって、栄光と平和は既に成就したと宣言し、賛美している。

神が臨在する栄光は、地で平和が実現していることを示す。逆に言えば、平和が実現している所には神が臨在する栄光がある。栄光と平和は一つのことである。主イエスのご降誕は、神の栄光であり、平和である。疎外されている者が神の栄光を見、共に生きる平和を体験する。これを信じて、生きることが福音に与ることである。